



特集

「花のまち」恵庭の礎を築いた住民主体の花壇づくり 恵庭市花いっぱい文化協会

シリーズ「北海道の木と文化」⑦ … 札幌市北3条広場のイチョウ並木〔札幌市〕

ほっかいどうの本 … 『北大総合博物館のすごい標本』 …… 北海道新聞社
『おばけのマールとすてきなことば』 …… 中西出版
『ほっかいどうの宝物〔第2集〕』 …… 共同文化社

「花のまち」恵庭の礎を築いた 住民主体の花壇づくり 恵庭市花いっぱい文化協会

2022年に開かれる第39回全国都市緑化北海道フェアのメイン会場は、「花のまち」恵庭市です。同フェアが道内で開かれるのは1984年の第4回札幌フェア(さっぽろ花と緑の博覧会)以来38年ぶり2回目。全国的にも知名度が上がった恵庭の花のまちづくりは、1961年に住民が自主的に始めた活動がきっかけでした。地元住民が設立した恵庭市花いっぱい文化協会は、その後も多くの方々や花苗生産者に支えられ、今年で60周年を迎えました。同協会の池永允子会長に活動の状況などを伺いました。(文と写真・片山健一 取材日 2020年8月24日)

7人で始めた 「花いっぱい運動」

1961年1月、「郷土を花いっぱい、緑いっぱい」を合い言葉に、恵庭の花いっぱい文化協会は誕生しました。2019年9月に人口7万人を突破した恵庭市ですが、当時は3万人弱の農村地帯で、旧漁通りに商店が少し並ぶ程度でした。長い冬が終わり、雪解けとともに、土ほこりやゴミが風に舞う荒涼とした春を迎えていました。

そんな街並みを見て秋田県雄物川



未来の花のまちづくりを担う子どもたち(写真提供: 恵庭市)

町(現横手市)出身の7人が、第二の故郷・恵庭を「雄物川のような美しい環境にしたい」と立ち上がりました。初代会長となる佐藤精一郎さんらメンバーは、会社や商店を訪ね「まちを花でいっぱいにしよう」と協力を呼び掛けていきます。

1962年春には正会員74人、協賛会は35会員となり、協賛会が寄贈した花苗3000株を町内の花壇に無料で配布しました。さらに花いっぱい運動を推進するために、花を増やす必要があり協会直営で花畑を造成し、育てた15万株を自衛隊駐屯地や小中学校に配布していきました。

このほか花の種や球根のあつせん、鉢物即売会、駅前や公園への球根の植え込みを実施するなど、2年目にして活動は一気に広がりを見せました。

佐藤会長は「この運動は、町全体の運動になったからこそ成功した。花いっぱい文化協会は単にそのきっかけを務めただけ」と当時の新聞取材に答えています。設立5年目の1966年には正会員127人、協賛会74会員に達し、市役所の北側のグリーンベルト(恵庭大通線)に5周年記念の植樹と、現在も続く花壇コンクールを初めて開催しました。

花いっぱい文化協会が発足した1961年には、花のまちづくりを



いけなが ちかこ
池永 允子さん

恵庭市花いっぱい文化協会会長

熊本県小川町（現・宇城市）出身。夫の転勤に伴い1979年から恵庭市に在住する。恵み野地区にあった大型スーパー店内で生花店を営んでいた縁で、花いっぱい文化協会の役員を務めることになり、1997年2月から幹事を1期2年、1999年2月から副会長を4期8年務めた。2007年2月から会長に就任し、現在7期目。花のまちづくりを見学に訪れた人を案内する花ガイド、道と川の駅「花ロードえにわ」の植栽を管理する花サポーター、景観に配慮した植花などの知識・技術を持つフラワーマスターとしてのボランティア活動も担っている。

支えるもう一つの力が動き始めます。この年、恵庭北高校の農業科が温室で花卉園芸の実験栽培を開始したのです。その影響を受けた一部の地元農家が、花苗の生産に取り組みます。米作りが生産の中心だった時代に、「園芸なんかでメシが食えるか」という周囲の反対もある中、農業青年たちはガラスの温室を自作してシクラメンの鉢植えを栽培し、春に出荷する花壇苗の生産などへと手を広げていきました。次第に「恵庭の苗は寒さに強い。花が長持ちする」と評判になり、札幌市の大通公園の花壇などに採用されるようになりました。1966年ごろから地元を生産者が花いっぱい文化協会に花苗を供給するようになり、1984年には恵庭市花苗生産組合が発足。恵庭で良

質な花苗を生産し、それを市民が安価に購入できる仕組みが定着しました。市内の需要は旺盛になり、目の肥えた市民に応えるため生産者も品質維持・改良、新商品開発などに励んでいきました。1980年代には道内を代表する花苗生産地となり、近年は道内生産量の約3割を恵庭産で占めるまでになっています。

地元の花で まちを華麗に彩る

現在の花いっぱい文化協会の活動について、現会長の池永さんは「基本的なことは60年前と変わりません。会を創設した7人の方々と同じく、ただ『自分のまちだからきれいにしよう』という思いで、花壇に花



1968年5月の花いっぱい文化協会直売所の様子（写真提供：恵庭市）

を植え、雑草を取っています」と説明します。

協会の事業は大きく4つ、①会員への花苗のあつせん②花壇コンクールの実施③公共花壇への花苗植栽④花の直売会と講習会の開催——です。2020年度の会員は市内の町内会、学校、商店会など66団体です。各団体は年会費を支払い、会員価格による花苗のあつせんを受けます。ペゴニア、マリーゴールドなど約30種類の夏の花苗を割安な価格で、協会役員でもある恵庭市花苗生産組合が届けるといいます。価格はもちろん、「新鮮で、根もしっかりとっている」ので花の持ちが全く違います」と池永さんは品質に太鼓判を押します。地元の生産者と消費者を結ぶ役割を担い、年間約9万株をあっせんしています。

花に関する技術の向上と普及、花壇づくりへの意欲を高めることを目的に、会員対象で開催する花壇コンクールは、今年で54回を数えます。町内会が参加する「一般の部」は、街区公園など公共の花壇に植栽した花の育成、管理、デザイン、色のバランスを審査して表彰します。今回の最優秀賞は黄金南曙ひまわり会で、4年連続5回目の栄誉に輝きました。学校花壇を審査する「学校の部」もありますが、今年は新型コロナウイルス感染症の影響で、子どもたちが花壇づくりに参加できなかったため、全校一律で努力賞としました。また、コンクール参加花壇の写真は、道と川の駅「花ロードえにわ」で1週間ほど展示します。「写真展を始めてから、町内会や学校の意識も変わり、非常にレベルアップしました」と池永さんは目を細めつつ、「最近と同じようなデザインが増えてきたので、今後は花の色合いや植え方などをアドバイスできたら」と



直売会に合わせて開かれている花の講習会（写真提供：恵庭市）

話します。

協会として直接手掛ける公共施設への花苗植栽は、市役所北側にある延長約600mの「グリーンベルト」に設けられた14カ所の花壇と、桜並木がある「黄金フラワールード」沿道花壇です。これらは市から委託を受けて、協会役員が中心となり管理します。市からの委託料は、他の事業の財源に充てるため、「役員には飲み物一つ出ない、完全なボランティアです」(池永さん)。

4月と9月に「花ロードえにわ」で開く花の直売会では、パンジーとビオラを店頭の価格より3割ほど安く販売しています。4月には春の花のほか、宿根草やイチゴの苗なども販売。9月には越冬する秋パン



夏の恵庭は至る所で花が咲き誇る
(写真提供：恵庭市)

ジー、ビオラのほか、ハボタンや菊などを販売します。直売会と同時に、花苗生産組合関係者や池永さんらが花の育て方を教える「花の講習会」も開催しています。

かつて池永さんは、長年続く協会の活動があまりに知られていないことにショックを受けた経験があり、「一生懸命やっているだけの自己満足ではなく、もっと外に発信しなければ」と考え、自らさまざまな花に関するボランティアを引き受け、積極的に会合やイベントに参加しています。協会事業のPRに努めています。初代会長の佐藤さんから聞いた「口だけでなく行動。自分が率先して動けば皆がついてくる」を心がけ実践しています。

協会では今年、60周年事業をいくつか企画していますが、必ずしも順調ではありません。毎年90人近くが参加し道内有名ガーデンを日帰りで見学する研修旅行を、今年は1泊2



児童たちに花の植え方や育て方を教える (写真提供：恵庭市)

日で行う予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で中止になりました。記念植樹も年内にできるか微妙な状況です。11月8日に開催予定の記念式典も、社会情勢の変化に対応しなければなりません。課題が多い分、「10年前の50周年とは比較にならないほど、役員会での議論は活発化しています」(池永さん)。「もっているものは笑顔だけ」という無報酬の活動に、「役員みんなが真剣に取り組んでいる」と議論の行方を見守ります。

空き地に造った「いいいの花畑」

恵庭市内で「花のまち」を最も象徴する地域が恵み野です。1980年に分譲を開始した、このニュータウンに暮らす住民が率先して花のある美しいまちづくりに取り組み、個人宅の庭を一般公開して人々と交流する「オープンガーデン」を広めました。



個人宅の庭。今年はコロナ禍でオープンガーデンも自粛中
(写真提供：恵庭市)

1990年代に入り、生活情報誌などに取り上げられて注目が高まり、全国から視察や見学者が訪れるようになりました。2004年には、恵み野花のまちづくり団体連合会が、国土交通省の都市景観大賞「美しいまちなみ大賞」を受賞しています。

2004年当時、恵み野西地区の住宅街には、25年間空き地になっていた約2300平方メートルの保育所建設用の市有地がありました。「美しい花のまちを目指しているのに、国道から入ってすぐの目立つ場所が荒地地なのはみっともない。自分たちで花を植えよう」と立ち上がったのが、池永さんを中心とする地域住民でした。市は当初、「市有地を個人や企業に貸すことはできない」と難色を示しましたが、半年がかりで説得した結果、当時池永さんが副会長を務める花いっぱい文化協会の事業として、市に資金や人的支援を求めないことを条件に、利用が認められました。



壁面にも立体的に植栽された恵み野駅前の遊歩道



ボランティアで造られた「いこいの花畑」



今秋完成予定の花の拠点「はなふる」のイメージ



花の拠点完成に先立ち今年4月にオープンした農畜産物直売所「花野菜（かのな）」の新店舗

農業機械会社の営業所長が手弁当で荒れ地を耕し、花は、池永さんが経営する生花店の売れ残りを植えたほか、「リヤカーを引いて近所を歩いて回り、いらない花をもらいました」（池永さん）。デザインのほしい花は、廃品回収をして資金を作り、購入していききました。そうして出来上がったのが「いこいの花畑」です。

苦勞して造った「いこいの花畑」でしたが5年後、市はその用地を宅地として売却することを決定します。再び池永さんは「せっかく集めた花だから、どこかに植えさせてほしい」と市に交渉すると、今度は道と川の駅「花ロードえにわ」の東側隣接地約1000平方メートルに移植できることになりました。2009年5月に行った花畑の引越しには、160人のボランティアが集まりました。

行政も積極的に活動を支援

恵庭の花のまちづくりは当初、自主的な市民活動や民間事業者を中心とする取り組みでしたが、今では行

新しい「いこいの花畑」は、道の駅という最も人目に触れるエリアです。池永さんらは、夏は毎日午前5時から3時間、除草作業など手入れに励みました。市から肥料の提供はあるものの、花は相変わらず自分たちで確保しなければなりません。花のまちにふさわしく、「ありきたりの花は植えないようにしよう」と珍しい花を探しては取り寄せ、200種以上を植栽しました。「結構、お金も使いました」と振り返り、苦笑します。

政も積極的に活動を支援しています。市は、1998年3月に「花のまちづくりプラン」を策定し、同4月に行政の一元的な窓口として「花と緑の課」を設置。同11月には花に関わる団体などで構成する「恵庭花のまちづくり推進会議」を設立し、協働で花のまちづくりを推進する体制を整えました。

現在、花いっぱい文化協会の事務局を担うのも、市の経済部花と緑・観光課です。担当の三浦貴大主任主事は「恵庭を花のまちにしようと、採算度外視で協力していただいている生産者の思いを含め、これまでの活動を冊子にまとめるなど積極的な広報に努めています」と言います。

さらに市は、道と川の駅「花ロードえにわ」周辺を「花のまち」らしい観光エリアとするために、花の拠点・愛称「はなふる」を整備しています。8・6haの敷地内では、花と緑に彩られた憩いの空間となる公園「ガーデンエリア」の新設、旧保健センターを改修した屋内施設「花の拠点センターハウス」の開設、民間事業者のノウハウを活用した宿泊施設の新築、農畜産物直売所の移転新築などを進めています。

池永さんらが、10年間続けた「花ロードえにわ」での「いこいの花畑」



「担当になって初めて知ること多いです」と話す花と緑・観光課の三浦さん

は、「はなふる」整備工事が2019年度から始まったため、花畑にあった草花は再び移植・保管されています。今秋オープンする約6haのガーデンエリアには、テーマ別に7つの庭園が設けられる予定で、一つは市民ボランティアが手掛ける「暮らしを恵む庭」になります。池永さんが育て上げた「いこいの花畑」の名前と草花は、その庭の中に残していく考えです。

花のまちづくりを将来にわたって持続するために、花壇づくりなどを担うボランティアの育成は欠かせません。市は「花を育てる知識や活動を広く知ってもらうことが、未来の担い手確保につながるのでは」（三浦さん）と期待を寄せ、池永さんらの活動をサポートし、共に汗を流しています。

お問い合わせ先 恵庭市花いっぱい文化協会事務局
恵庭市京町1番地 恵庭市役所3階 花と緑・観光課
0123-33-3131（内線2525）

北海道の 木と文化 ⑦



札幌市北3条広場の イチヨウ並木〔札幌市〕

〔文と写真・片山健一〕取材日2020年8月27日



木陰に座って
休憩できる植栽樹

北海道内最古の街路樹 樹齢1000年を超える29本 道都の変遷を見守る

高さ約100メートルの超高層ビルに挟まれた札幌市北3条広場（愛称・アカプラ）は、2014年7月19日に供用を開始した都市計画広場です。オフィス街の中で、誰もが気軽に休憩できる貴重なオープンスペース、また週末には音楽やグルメなどのイベントが開かれる場として、多くの市民や観光客ににぎわい、親しまれています。シンボルとなっている樹齢1000年を超えるイチヨウの並木は、この広場がかつて札幌で最初の近代街路だった証でもあります。

道路を居心地の良い憩いの空間に

北海道庁赤れんが庁舎に面する北3条広場は、北3

条通（市道北3条線）の西4丁目部分約100メートル区間を、車両通行禁止にして開設されました。

赤れんが庁舎と調和した居心地の良い空間になるよう、約2800平方メートルの広場全面にレンガを敷き詰め、イベントの際に使用できる電気設備や給排水設備もあります。また、道路と広場を明確に区分するため、札幌駅前通や西5丁目線との境界には、プラントアーやベンチ機能を持ったボラード（車止め）も設置しています。

広場整備に先立ち、街路樹のイチヨウを調べたところ、太い根は地中深く伸びているものの、日照・水分の変化などで生育環境が悪化していることが判明しました。幹の直径が1メートルに及ぶ大木を取り囲む新しい植栽樹は、従来の狭い植樹帯ではなく、木が2、3本ずつ収まる大きな樹を作り、根元には土壌の乾燥を防止する地被植物を植え込むなどの改善を図りました。さらに植栽樹自体がベンチとして機能するよう、レンガをフランス積みにして地面より50センチほど高く仕上げました。

札幌の歴史を受け継ぐ広場

北3条広場の基となった北3条通が造られたのは、明治初頭。当時は「札幌通」と名付けられ、東に延びる通り沿いには札幌農学校や開拓使の官営工場など、さまざまな機関が集まりました。大正に入り国道4号に認定された道庁赤れんが庁舎正門前から札幌駅前通までの約117メートル区間が1924年、砂利道ばかりの札幌で初の舗装道路になりました。舗装方法は歩道と

車道で異なり、両側の歩道はアスファルト、車道は木塊と呼ばれる木のブロックによる舗装でした。

木塊は、道南地方のブナ材から長さ15センチ、幅9センチ、厚さ8.5センチのブロックを切り出し、防腐剤を注入して作製したものです。当時の最高技術でしたが、摩耗しやすく、冬は凍上するため、1930年に木塊舗装はアスファルトで覆われます。

それ以降の工事でも、木塊舗装の層は掘り起こされることなく保存され、北3条広場のレンガ舗装の下には、現存最古とも言われる木塊舗装が今も埋まっています。

札幌初の舗装道路となった翌年の1925年、車道と歩道の境目に植えられたのが、当時、北海道では入手困難だったイチヨウの木です。荒川堤防の補強用に育成されていた樹齢19年の木32本を東京土木事務所から譲り受けました。街路樹と共に6基の街灯も設置され、近代的な街路が完成しました。

北3条広場に現存するイチヨウの木は、北側14本、南側15本の計29本です。道内で最古の街路樹を管理する札幌市中央区土木センターでは、毎年6月ごろに枯れ枝などの剪定を行い、樹高も高所作業車が届く18メートルにそろえ、並木の美しい景観を維持し、広場が安全に利用できるよう管理しているそうです。



高層ビルが立ち並ぶ札幌駅前通に面した北3条広場の秋。黄葉したイチヨウがアクセントを添える

札幌・北3条通

明治初期の「札幌通」という呼び名のほか、「苗穂通」「開拓使通」「ケプロン通」といった通称もあります。1937年まで路面電車「苗穂線」も走っていました。



（上）道庁赤れんが庁舎へ連なるレンガ敷きの広場とイチヨウ並木
（下）1925年頃の北3条通（旧国道4号）（出典：北海道道路誌）

ほっかいどうの本

(お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。特記以外は税込価格です)

北大総合博物館のすごい標本

北海道大学総合博物館 編
北海道新聞社 発行
011・210・5744
A5判 240頁 2530円



北海道大学総合博物館にある膨大な量の標本。これらはすべてが解明されているわけではなく、研究成果を保存する役割に留まらない、新たな研究対象となり得るフロンティアとしても重要な位置を占めていると本書に記されています。

ボランティアの手により現在進行形で整理されている10万点以上の植物標本や、恐らくすべての箱に新種が含まれているだろうと言われる20万個体を超えるコバチ類の標本など、わくわくするような標本たちの一部が紹介されています。

掲載されている写真からは、まるで宝石のように整然と並べられたオサムシ、果実酒の瓶に漬けられたアナゴ、様々な昆虫が並べられた箱の中にしれっと紛れ込まれたカニなど、研究に携わる人々の熱意と遊び心が感じられます。ただの記録・見本として以上の可能性を内包した存在としての標本の魅力を教えてくれます。

デジタル・バーチャルの発達した時代において、現物を間近に見られるリアル博物館の価値が伝わってくる一冊です。

(東京営業部 真野友華)

おばけのマールとすてきなことば

けいたろう 文／なかいれい 絵
中西出版 発行
011・785・0737
A4変型判 32頁 1320円



本書は、さつぽろのまるやまに住む可愛らしいおばけのマールが主人公の絵本で、ファン待望のシリーズ最新巻です。

タイトルにある「すてきなことば」とは、アイヌ語のことです。たくさん動物とお友達になったマールは、アイヌ語でイランカラプテとご挨拶をしたり、一緒に遊んだり、けんかしちゃったり……。カラフルな文字とコミカルな動物たちが織りなす、明るく楽しい絵本の世界が広がります。これまで札幌市時計台や、さつぽろ雪まつりなどおなじみの景色が登場してきましたが、今作では今話題のウポポイ(民族共生象徴空間)が描かれているのも見所です。

アイヌ語の単語がメインとなり全体的な文字量は少なめのため、小さな子どもでも一緒に音読することが出来ます。同シリーズの大ファンで私の2歳になる息子も、親のあとに続いて上手にアイヌ語を音読し、楽しくページを捲っています。アイヌ語の響きもすてきなもので、大人の皆さんにもぜひ声に出して読んでほしい絵本です。

(トレス部 高木美穂)

ほっかいどうの宝物「第2集」

橋本 登代子 著
共同文化社 発行
011・251・8078
四六判 288頁 1650円



フリーアナウンサーの橋本登代子さんが、パーソナリティを務めているSTVラジオ番組「TONちゃんほっかいどう大好き」での内容を厳選して収録した対談集の第2集です。

北海道で働く様々な人々たちを発掘、インタビューする番組で、2005年4月のスタートから本書が発刊される2020年7月までに200名以上のゲストを迎えてきました。その中から18名を厳選し掲載しています。

子どものころからの「北海道で大好きな馬と暮らしたい」という長年の夢をかなえるため東京から移住してきたパティシエールのお話や、フランスで食べた羊のヨーグルトに感動して50代から独学で羊を育て乳製品を作る元教師、刑務所から出所した居場所のない人たちに働く場を提供する会社の社長など、様々な背景を持つ人々が大好きな北海道で働き、暮らすことについて語っています。

北海道に住んでいると見逃しがちな風土の魅力を再発見できるほか、人生どんなに失敗しても、何歳からでもチャレンジできる。そんな感動と元気をもらえます。

(北海道営業部 土田和史)

新刊情報

書名の下に数字は日本図書コード（ISBN）及び雑誌コード。特記以外は税込価格。
お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。

化石先生は夢を握る

忠類ナウマンソウからサツボロカイギュウまで

978-4-89453-986-9

木村 方一 著

A5変型判 144頁 1980円

検証ブラックアウト

北海道胆振東部地震

978-4-89453-988-3

北海道新聞社 編

四六判 240頁 1650円

改訂第2版 北海道の野鳥

978-4-89453-985-2

北海道新聞社 編

B6判 392頁 2750円

夢ひろく大地 新北海道ひと紀行

978-4-89453-987-6

北海道新聞社 編

B5変型判 208頁 1980円

やっぱりそつでしょ 札幌のクラス③

978-4-89453-989-0

中村 眞樹子 著

B6判 176頁 1540円

ファイターズ検定公式問題集

978-4-86721-003-1

北海道新聞社 編

四六判 160頁 1100円

ファイターズ検定公式ガイドブック

978-4-86721-004-8

北海道新聞社 編

A5判 200頁 1430円

道新プラス道新受験情報

2021高校入試 合格データ特集

16747-08

北海道新聞社 編

B5判 282頁 880円

北海道新聞社

〒0711 札幌市中央区大通西3-6
011・210・5744

日本産ハバチ・キバチ類図鑑

978-4-8329-1408-7

内藤 親彦・篠原 明彦・

原 秀穂 著／伊藤 ふくお 写真

B5判 552頁 19800円

ブックレット・ボーダーズ7

知っておきたいパラオ

ボーダーランズの記憶を求めて 978-4-8329-8833-9

古川 浩司・ルルケド 薫 編著

B5判 60頁 990円

発行元：特定非営利活動法人国境

地域研究センター

発売元：北海道大学出版会

地震による地すべり災害

2018年北海道胆振東部地震 978-4-8329-8236-2

「地震による地すべり災害」刊行委員会 編

B5判 370頁 6930円

北海道大学出版会

〒0603 札幌市北区北9条西8丁目
011・747・2308

ひきこもり事務長

ぼくの心は2つある

978-4-89115-381-6

木村 瑞穂 編

四六判 181頁 1320円

国土のゆとり

「水辺緩衝空間」を活用して安全で豊かな国土を目指す

978-4-89115-383-0

吉井 厚志 著

A5判 262頁 2750円

中西出版

〒0703 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
011・7885・0737

飼料設計・給餌の基本と実践

粗飼料生産から牛群マネジメントまで

978-4-86453-072-9

泉 賢一 監修

A4判 228頁 4819円

デリーマン社

〒0004 札幌市中央区北4条西13丁目
011・2331・5261

福井県と北海道の縁

北海道移民史を中心として

978-4-8328-2003-6

北国 諒星 著

四六判 252頁 1870円

北海道出版企画センター

〒0018 札幌市北区北18条西6丁目2-47
011・737・1755

シリーズ世界の文豪 宝島

978-4-434-27074-1

R・L・ステイヴンソン 著／

中山 善之 訳

四六判 288頁 1760円

柏艸舎

〒0002 札幌市中央区北2条西3丁目
011・219・1211

ペンとミシンとヴァイオリン

アフガン難民の抵抗と民主化への道

978-4-908261-27-2

清末 愛砂 著

四六判 100頁 1650円

ハッピーライフ

978-4-908261-30-2

北大路 公子 著

四六判 112頁 1650円

寿郎社

〒0007 札幌市北区北7条西2丁目
011・708・8566

AURORA HAPPY

978-4-990490-3-2

中垣 哲也 撮影・文

B5判 96頁 2000円

オーロラダンス出版

〒0402 札幌市中央区宮の森2条15丁目3-1
090・6214・7546

ほかいどうの宝物 [第2集]

978-4-8738-342-7

橋本 登代子 著

四六判 288頁 1650円

爪句@西野市民の森物語り

978-4-8738-343-4

青木 曲直 著

100ミリ×74ミリ 232頁 500円

共同文化社

〒0003 札幌市中央区北3条東5丁目
011・2511・8078

紙のば 表のこと

秋の暮

山本 俊

木版画 13・5センチ×15・5センチ

小樽運河を巡っては、過去2回の論争があった。ひとつは築造の基本方針であり、更に昭和48年、行政の埋め立て案に対して起きた運河保存運動である。

かくして一部埋め立てが完了し、散策路が開通したのは昭和61年のことで、現在の観光スポットは、かつて政争の具であった。

この夕景は、同市堺町の見晴し坂付近から、北運河方面を展望したもので、中央の建物が北海製罐小樽工場である。

全道美術協会（全道展）会友 札幌市在住



※季刊アイワードのバックナンバーを
弊社ホームページよりご覧いただけます。
URL <https://iword.co.jp>